

2020年度12月例会は、ひこ・田中氏をお迎えし、「子どもの本の可能性」というタイトルでご講演をいただきました。

初めてのオンライン例会でしたが、多くの方にご参加いただき、盛会のうちに終えることができました。

ひこ先生がご用意くださった資料の配布ができませんでしたので、ご許可をいただき、本ホームページに掲載させていただきます。

2020年度日本児童文学学会例会

日時：2020年12月12日(土) 午後2時～4時 ZOOMにて開催

〈講演〉

子どもの本の可能性

ひこ・田中 氏 (児童文学作家)

司会＝宮川 健郎 (大阪国際児童文学振興財団理事長)

例会配付資料 「大人も読んで欲しい作品たち」(ひこ・田中氏作成)

【YA小説】

〈ジェンダー〉

『嘘の木』(フランシス・ハーディング：作 児玉 敦子：訳 東京創元社)

進化論が世を騒がせている時代の英国。嘘を与えると真実を教えてくれる嘘の木、父親が謎の死を遂げてから主人公は、その木に話しかけますが……。思いとは違う嘘を演じながらしか生きられなかった女たちを巡る物語です。彼女たちにとって、男性社会こそが嘘の木なのです。

『サイモン vs 人類平等化計画』(ベッキー・アルバータリ：作 三辺 律子：訳 岩波書店)

サイモンはネットで知り合った男子のブルーと恋仲になる。ブルーが誰かを知りたいし、自分が誰かを教えたいけれど、それにはカミングアウトという壁がある。なんでだよ！色んな事が前に進む、素敵な恋物語。

『ドレスを着た男子』(デヴィット・ウイリアムズ：作 鹿田昌美・訳 福音館書店)

サッカー少年のデニスはヴォーグに惹かれます。女の子の服を着たい自分を発見したのです。女の子のサポートで女装を楽しみ、別人として学校に行き、ばれてしまいます。でも、好きな服を着ていいよね。そう伝える物語が素敵。

『夜フクロウとドッグフィッシュ』（ホリー・ゴールドバーグ・スローン&メグ・ウォリッツァー：作 三辺律子：訳 小学館）

父親同士が恋人になったために、ベットとエイヴリーの 2 人は同じキャンプに入れられてしまいます。そんなの絶対に認めない！

『兄の名はジェシカ』（ジョン・ポイン：作 原田勝：訳 あすなろ書房）

サムにとって兄のジェイソンはヒーロー。学校でもサッカーがうまくて人気者だし、カッコいい。ある日ジェイソンが家族に打ち明けた。自分は男ではなく女だと思うと。女でありたいと。しかし、サムは、あこがれの兄でいて欲しい。弟の視点から描いた物語です。

『九時の月』（デボラ・エリス：作 もりうちすみこ：訳 さ・え・ら書房）

革命後のイラン。十五歳のファリンは、転校生のサディーラに惹かれます。サディーラもまた。やがてそれは愛情に変わっていきます。が、同性との愛は死刑に処せられるほど固く禁じられていて……。

『目覚めの森の美女』（ディアドラ・サリヴァン：作 田中亜希子：訳 東京創元社）

有名な昔話、童話、14 編のフェミニズムによる再構築。原話から様々な方法で距離を置き、一步先まで踏み込んでいます。「シンデレラ」だと、彼女は漸く自分自身になりました。

『思いはいのり、言葉はつばさ』（まはら三桃 アリス館）

歌が得意なハル族の母親と漢族の父親を持つチャオミンは、歌が大好きで、纏足をさせられた少女。ある日、女だけに密かに伝えられてきた文字「女書」の存在を知り、自分も習い始めます。言葉は歌と文字によって、女たちの思いをつないでいく。

〈戦争〉

『ぼくたちがギンターを殺そうとした日』（ヘルマン・シュルツ：作 渡辺広佐：訳 徳間書店）

敗戦直前のドイツの村に難民として暮らすことになった子どもたちはその中の一人にひどいいじめをし、それが発覚するのを恐れて、彼を殺そうとする。戦争が子どもにも与えてしまった価値観を描きます。

『キオスク』（ローベルト・ゼーターラー：作 酒寄進一：訳 東宣社）

フランスはキオスクで働くためウィーンに出てくる。時は一九三七年。純真無垢で一途なフランスと、亡命直前の老いたフロイトの奇妙で暖かい友情。不穏な時代の中でも息づいている青春の揺れ。当たり前なのが生々しいYA小説。

『火打箱』（サリー・ガードナー：作 デイヴィッド・ロバーツ：絵 山田順子：訳 東京創元社）

アンデルセン作品を元に舞台を 30 年戦争時代に、焦点は戦争とテロと不振と不寛容が蔓延する現代に当てた新構築。デイヴィッド・ロバーツの挿絵が物語に食らいつき、テキストと溶け合い、私たちを離さない。

〈差別・抑圧〉

『ぼくだけのぶちまけ日記』（スーザン・ニールセン：作 長友恵子：訳 岩波書店）

いじめられていた兄は相手を射殺し自殺する。家族は引っ越しをし、事件のことは近所にも学校の生徒たち

にも秘密だから友達を作るのも難しい。そんなヘンリーの日記は生きる切実さに満ちています。

『キャラメル色のわたし』（シャロン・M・ドレイパー：作 横山和江：訳 すずき出版）

白人を母親に、黒人を父親に持つイザベラは、離婚した両親の家を1週間ごとに行き来するのうんざり。日常生活では、人種差別に遭遇しています。最後に起こる事件が、日々の差別の延長線上にあることをよく伝えてくれます。

『むこう岸』（安田夏菜 講談社）

生活保護家庭の中学生樹希は、高校生になってバイトをしたら其の分を惹かれるし、大学進学はできないとケースワーカーに言われるが、実は……。学校では教えてくれないけど、大事な知識がある。

『路上のストライカー』（マイケル・ウイリアムズ：作 さくまゆみこ：訳 岩波書店）

ジンバブエのグツで暮らすデオ。大統領選の後、大統領に投票しなかった者の調査が行われ、デオは何とか逃げ出します。しかし、南アフリカも楽園ではありません。難民の彼らに職を奪われた人々の暴動……。

〈家族〉

『ゴースト』（ジェイソン・レイノルズ：作 ないとうふみこ：訳 小峰書店）

陸上の練習を見ていたら、ちょっとと思う。だってゴーストは銃を向けた父親から逃げ切ったのだから。そして本当に速かった。抱える状況によって狭くなってしまっていたゴーストの視野がしだいに広がっていく様子が心地いい。

『エリーゼさんをさがして』（梨屋アリエ 講談社）

自分の価値判断を押しつける母親によってピアノ教室をやめさせられた中学生の亜美が、介護施設での伴奏のボランティアや、高校生のミュージシャン、ポーラ C との出会いによって自立していく姿が描かれています。社会に開かれた形の成長がよいです。

『拝啓パンクスノットデッドさま』（石川宏千花 くもん出版）

苛酷な状況下で、それを考え、周りの人たちの言葉や態度を分析していく主人公晴己が特別な少年ではなく15、6才であればもうそうであろうこととして描かれているのがとてもよい。

『エレナーとパーク』（レインボー・ローウェル：作 三辺律子：訳 辰巳出版）

パークは一六歳。時は1986年。スクールバスでパークの隣に転校生のエレナーが座る。二人の物語が始まる。恋物語お決まり感情の揺れではなく、恋以前からの二人の気持ちが省かれることなく事細かく描かれるから切ない。

〈その他〉

『moja』（吉田桃子 講談社）

理紗はかわいくて優しいと友達から思われているけれど、悩みがある。毛深いこと。理紗がどう自分を受け止め、受け入れ、本当の自分を解放していくかを、日々の生活の中での心の揺れとして丁寧に描いています。

『アドリブ』（佐藤まどか あすなろ書房）

音楽小説です。といっても、超絶テクニックの競い合いとかそういうことではなくて、一人の少年がフルートの音色と出会って、全く弾けないまま音楽学校に入り、少しずつフルートを自分の音にしていく様と、その日常が描かれていきます。バトル好きには向きませんが、音楽と向き合ってしまった子どもの成長を辿るには心地の良い作品です。

『世界のはての少年』（ジュラルディン・マコックラン：作 杉田七重：訳 東京創元社）

貧しい島では海鳥が集まる夏に、子どもたちが無人島まで出かけて一週間ほど海鳥を捕まえます。が、なぜか迎えの船はやってきません。今も変わらない人の有り様が浮かび上がってくる、読み始めると止まらない作品。

『僕には世界がふたつある』（ニール・シャスタマン：作 金原瑞人・西田佳子：訳 集英社）

ケイダンは十五歳。学校で誰かが僕を殺そうとしている。親に言っても信用されない。どこへ向かうかもわからない精神疾患と、とりあえずのそこからの帰還を描いています。そのキツイ彷徨は、「青春」そのものとも重なっていきます。

【絵本】

〈ジェンダー〉

『ジュリアンはマーメイド』（ジェシカ・ラブ：作 横山和江：訳 サウザンブックス社）

おばあちゃんとスイミングの帰りにマーメイド姿のおねえさんたちを見たジュリアン。自分もマーメイドになりたい！ 自由な祝祭に身を任せ、心が浮き立つ絵本です。

『ふたりママの家で』（パトリシア・ポラッコ：絵・文 中川亜紀子：訳 サウザンブックス社）

「わたし」が語る、二人のママとの日々は、どこにでもある家族である幸せ、仲の良い近所づきあいの楽しさであり、それ以上でもそれ以下でもなく、互いが受け入れることの心地よさにあふれています。

『レッド』（マイケル・ホール：作 上田勢子：訳 子どもの未来）

クレヨンのレッド。実はブルーなのに包装紙が間違っってレッド。イチゴが描けない。オレンジを描くためにイエローと共同作業をするけど、オレンジ色にならない。レッドが自分を発見して、綺麗な青空を描く物語です。

『はつめいだいすき』（ピップ・ジョーンズ：ぶん サラ・オギルヴィー：え 福本友美子：やく BL出版）

イジーは発明が大好き。ある日、羽を痛めたカラスがやってきて、イジーは羽の代わりに発明しようと、色んな物から色んなパーツをこっそり失敬するのですが……。失敗を重ねる努力が素敵。

『女と男のちがって？』（プランテルグループ：文 ルシ・グティエレス：絵 宇野和美：訳 あかね書房）

フランコ独裁が終わったスペインで作られた、新しい価値観を伝えるための絵本の一冊。ですから古い作品なのですが、日本で読むと全然古くないのが悲しい。それと、女と男だけでは語れない現代のジェンダーのために、少し書き換えられています。

『発明家になった女の子マッティ』（エミリー・アーノルド・マッカーリー：作 宮坂宏美：訳 光村教育図書）

十九世紀に活躍した女性発明家の話です。彼女は襤のある紙袋製造器を作りますがアイデアを盗まれ特許を取られます。が訴えて見事勝ち、自ら紙袋会社を興し成功します。こんな人がいたんだ。

『どろんこのおともだち』（バーバラ・マクリットック：作 福本友美子：訳 ほるぷ出版）

おばあちゃんからもらった、きれいなドレスを着た人形。でも、やっぱりいっしょの泥んこ遊びをしなくちゃね。どろだらけのお人形を見たおばあちゃんは何？

『数学はわたしのことば』（シェリル・バードー：文 バーバラ・マクリットック：絵 福本友美子：訳 ほるぷ出版）

ソフィーは数学が大スキな女の子。ところがその時代、女の子が大学に行って数学を勉強するなんてとんでもない！そこでソフィーは男性名義で論文を投稿。やがて女生徒知られ……。実在の数学者がモデルの絵本。

『わたしは女の子だから 世界を変える夢をあきらめない子どもたち』（ローズマリー・マカーニー：文 西田佳子：訳 西村書店）

貧困、早婚、未就学、妊娠・出産。様々な困難の中にある女の子たちが紹介されています。一人一人の話が、私たちの内なる性差別を気づかせますように。

『男の子でもできること みんなの未来とねがい』（国際 NGO プラン・インターナショナル：文 金原瑞人：訳 西村書店）

男の子たちが描くことの出来る自由な未来。一方女の子は？男の子たちも一緒に考えないか？と、この写真絵本は問いかけます。

『かみさまからのおくりもの』（ひぐちみちこ：作 こぐま社）

さりげなくジェンダーバイアスに満ちた、今でも読み継がれている絵本

〈障害〉

『くろは おうさま』（メネナ・コティン：文 ロサナ・ファリア：絵 うのかずみ：訳 サザンブックス）

視覚障害者と、そうでない人のための、色についての触る絵本です。左に「あかは イチゴ〜」、右にはイチゴの絵。色が見える人は、黒い画面に触れながら、新たに色を思い浮かべてみてください。

『マルコとパンパ ダウン症のあるむすことぼくのスケッチ』（グスティ 宇野和美：訳 偕成社）

マルコが生まれてからの日々を飾ることなく、ユーモアも忘れず、存分に描いています。

「絵なら やぶりすてられる」「だけど、子どもは……ほんもの子どもは そうはいかない」。読者も豊かになれます。

『すずちゃんのうみそ 自閉症スペクトラムのすずちゃんの、ママからのおてがみ』（竹山美奈子：文 三木葉苗：絵 岩崎書店）

自閉症スペクトラムのすずちゃんの母親が、すずちゃんと幼稚園で一緒だった子どもたちの娘への疑問に答えます。

『パパと怒り鬼』（グロー・ダーレ：作 スヴァイン・ニーフース：絵 大島香織・青木順子：共訳 ひさかたチャイルド）

突然怒りが嵩じると暴力が止められないパパ。ママはすっかり気力を失っています。主人公の少年はようやく外に出て、訴えかけます。DVを描いた絵本です。

〈戦争〉

『ヒロシマ 消えたかぞく』（指田和 鈴木六郎：写真 ポプラ社）

これは床屋を営んでいた鈴木六郎さんが撮った家族写真集。フジエさん、英昭くん、公子ちゃん。唯一無二の四人家族。撮られた笑顔の日常はどこにでもありそう。そう、どこにでもありそうで、唯一無二の家族であること。そこが伝わります。

『1944ー1945年 少女たちの学級日誌 瀬田国民学校五年智組』（吉村 文成：著 偕成社）

一九四四年四月から一年間、滋賀県瀬田国民学校五年智組の生徒が綴った学級日誌です。

七〇年以上前、戦争まっただ中の小学五年生が、その日に学校であったこと、思ったことを絵と言葉で描いています。

『せんそうがやってきた日』（ニコラ・デイビス：作 レベッカ・コップ：絵 長友恵子：訳 すずき出版）

戦争がやってきた日。学校で「ぼく」のイスはなくなってしまう。ところがクラスの子どもたちは……。

『みどりのトカゲとあかいながしかく』（スティーブ・アントニー：作・絵 吉上恭太：訳 徳間書店）

ページを開くと、みどりのトカゲとあかいながしかくの形状の物が争っています。戦争です。それがみどりのトカゲとあかのとかげといった対立でないところに、この作品の深度があります。

『この本をかくして』（マーガレット・ワイルド：文 フレヤ・ブラックウッド：絵 アーサー・ビナー
ド：訳 岩崎書店）

戦争が始まり、図書館が焼ける。まだ返していなかった一冊の本。逃げ惑いながら親子はそれを宝物のように守っていく。

〈難民・マイノリティ〉

『石たちの声がきこえる』（マーグリート・ルアーズ：作 ニザール・アリー・バドル：絵 前田君江：訳 新日本出版）

シリア難民を描いた絵本です。何がすごかって、その絵です。ニザール・アリー・バドルはそれらをすべて、拾ってきた小石を使って表現しているのです。それらが胸に迫るほどの表情を持っています。石って暖かいのがわかります。

『MARCH』(ジョン・ルイス、アンデリュー・アイデン：作 ネイト・パウエル：画 押野素子：訳 全三巻 岩波書店)

先頃亡くなったジョン・ルイスが学生時代に始めた公民権運動の歴史を描いたグラフィックノベルです。

『ZENOBIA』(モーテン・デュアー：文 ラース・ホーネマン：絵 荒木美弥子：訳 サウザンブックス社)

家族を亡くしたシリアの少女は難民船に乗るのですが、それが大破し、少女は海に沈んでいきます。ハッピーエンドではないグラフィックノベル。

『わたしたちだけのときは』(デイヴィッド・アレキサンダー・ロバートソン：文 ジュリー・フレット：絵 横山和江：訳 岩波書店)

カナダ政府が、先住民にとった、同化政策を描いた絵本。子どもを家族から引き離して寄宿舎学校に入れ、制服を着せ、髪を切り、彼らの言語を禁じました。2008年、カナダ政府は公式に謝罪します。何年過ぎようとも、謝罪する機会はあるし、謝罪する意味はあるのです。

〈死〉

『黒グルミのからのなかに』(ミュリエル・マンゴー：文 カルメン・セゴヴィア：絵 ときありえ：訳 西村書店)

ある朝、母親は自分がもうすぐ死ぬとポールに告げます。死神がやってくると言うのです。家を飛び出したポールは死神と出会います。そして、命を刈る鎌を奪い、死神を黒グルミのからのなかに閉じ込め、海に捨てます。この絵本は「死」が自然の営みの一つだと教えてくれます。

『悲しい本』(マイケル・ローゼン：作 クエンティン・ブレイク：絵 谷川 俊太郎：訳 あかね書房)

最初の絵で、男は笑っていますが、それを描く線はとても荒々しい。添えられた言葉は「幸せそうに見えるかもしれない。じつは、悲しいのだが、幸せなふりをしているのだ。悲しく見えると、ひとに好かれないのではないかと思ってそうしているのだ」。彼は、息子のエディーを亡くしたのです。ここには、悲しむ人間の生々しい姿が赤裸々に描かれています。

『鳥箱先生とフウねずみ』(宮沢賢治：作 吉田尚令：絵 ミキハウス)

鶯のヒナが入られた鳥箱は、自分は先生なのだと思い込み、いばりちらし、ヒナは死にます。それでも自分はよい先生だと思い込む鳥箱。仕付けのためネズミの母親が鳥箱に子ネズミを預けてしまうのですが……。最後のページでこれは現代の物語だと気づかされます。

〈その他〉

『もしぼくが本だったら』(ジョゼ・ジョルジュ・レトリア：ぶん アンドレ・レトリア：え 宇野和美：やく アノニマ・スタジオ)

本に心を寄せて、本の思いを綴った言葉たちが、絵本になっています。本当にもう、そうとしか言いようのない、いとおいしい絵本。

『ガール・イン・レッド』（ロベルト・インノチェンティ：原案・絵 アーロン・フリッシュ：文 金原瑞人 西村書店）

大都会のアパートに住んでいる少女ソフィアがお母さんに頼まれて、町の反対側に住んでいるおばあさんの家へお届け物にでかけます。今日の衣装はフード付きの真っ赤なコートです。どこかで聞いた物語。大都会のビル街を森に見立てて、昔話を現代によみがえらせました。

『歌う悪霊—北アフリカサエル地方の昔話から』（ナセル・ケミル：ぶん エムル・オルン：え カンゾウ・シマダ：やく 小峰書店）

昔々、毎日の食べ物にも困る貧しい家族がいました。誰も手を出していない荒地がありますが、ここには悪霊が住んでいるという噂です。家族を幸せにしたいと思った男は、そこで麦を育てることを決めますが…

…。